



化学肥料を手にする三浦さん。大規模だけに使う量も多い

継続を判断したが、肥料高は畑作の根幹の輪作体系にも影響を及ぼしている。

農林水産省の2020年のデータによると、個人の農業経営に占める肥料費の割合は、畑作が14%で水田(11%)、酪農(3%)に比べて高い。十勝管内のように規模が大きければ、それだけ大量の肥料を使用する。道内で作付面積31ヘクタールの畑作農家の場合、肥料費は平均で522万円。JA関係者は「もし肥料価格が2倍に上がれば、農業所得は6割低下する。かなりの所得が吹き飛んでしまう」と説明する。

価格高騰の背景には複数の変動要因が重なり合う。日本は、化学肥料の原料になる「窒素・リン酸・カリ」のほぼ全量を輸入に依存するが、主要産出国の中国が昨秋以降、自国内への供給を優先して輸出規制を始めた。輸送コストの上昇やロシアのウクライナ侵攻が加わり、大幅な円安がさらに拍車を掛けた。

価格は高騰の背景には複数の変動要因が重なり合う。日本は、化学肥料の原料になる「窒素・リン酸・カリ」のほぼ全量を輸入に依存するが、主要産出国の中国が昨秋以降、自国内への供給を優先して輸出規制を始めた。輸送コストの上昇やロシアのウクライナ侵攻が加わり、大幅な円安がさらに拍車を掛けた。

政府は物価高対策の中で、肥料高騰分の7割補填(ほ

てん)を打ち出したものの、長期化するウクライナ情勢や円安の進行など先行きは見通せない。世界の肥料需要が増加し続ける中、確保し続けられるかという問題もある。

ウクライナ侵攻を契機にクローズアップされる食料安全保障の強化について、元農水官僚で日本政策金融公庫専務を務めた新井毅氏は『食料の輸入の確保』の面での問題は少ない」とみている。一方、現在のような肥料原料や飼料の供給不安が、国内農業の維持と増産を脅かす存在だと強調。「日本の食料安保とは、肥料など農業資材の安定供給と価格変動時にどう対応していくか」と語り、その在り方に警鐘を鳴らす。

◆成分や量見直し

火山灰土の痩せ地が多かった十勝は、地力向上や基盤整備に加えて化学肥料で生産量を増やしてきた。養分が過剰との研究成果も出ていたが、減収を恐れて長年の施肥方法が続いてきた。今回の肥料危機を受けて、有機物の活用や肥料の成分や量を見直そうとの機運が高まりつつある。

土壌肥料学が専門の道総研農業研究本部(空知管内長沼町)の笛木伸彦研究主幹は「肥料価格が以前の水準に戻るとは考えにくい。この波を持続的な農業に変えるチャンスにしなければ」と力を込めた。

【永久キャンペーン 土づくり～肥料高騰に挑む 十勝の現場から(中)】

2022年11月12日(土)

活用進む堆肥 効果実感 課題は地域差

肥料価格の高騰に伴い、堆肥や緑肥などの有機物に改めて目が向けられている。地力を上げるという従来の代替肥料としての効果に加え、最近はコスト削減につながると十勝管内の農家も期待。国の支援の要件に堆肥の活用も盛り込まれたこともあり、管内の取扱業者は「引き合いは強い。製造も輸送も間に合わない」と話す。

◆畑作85%が利用

JAネットワーク十勝などが2018年に管内の畑作農家に行った調査では、85%が堆肥を「利用している」と答えた。「増収した」や「冷害年も減収しない」と効果を実感する声も多かった。過去の調査でも利用は8割を超えていて土づくりに定着している。

ただ、「(施肥する)労力がない」や「雑草が増える」といった理由で堆肥を使わない人も一定数いる。効果については「変わらない」との回答が15%あった。投入量や投入頻度で最も多かった回答の「10アール当たり2トン」「4年に一度」だが、研究者からは「たまに数トン投入する程度では、あまり大きな効果は期待できない」との指摘がある。完熟した堆肥なのか水分の多い生堆肥か、投入する質量には個人差が浮かび上がる。

「地力向上は費用対効果の判断が難しい」。こうした現場の声を受けて、十勝農業改良普及センター西部支所は20年度までの5年間、鹿追町中瓜幕の農家13戸とともに

実証試験を行った。既に堆肥を利用する地域だったが、土壌分析の結果から畑ごとに異なる投入時期や量を検証した結果、肥沃(ひよく)度を示す熱水抽出性窒素がさらに向上。家畜ふん尿由来の液肥「消化液」の利用も広がった。

中瓜幕地区は山に近くて気温が低く、耕作に苦労してきた。参加した畑作農家の土屋克敏さん(48)は「堆肥を入れ続けたことで、収量が天候に大きく左右されなくなった気がする。1、2年で効果は出ないが、続ければ間違いなく力は付いてくる」と変化を口にした。

◆広域利用支援を

畜産現場から出る家畜ふん尿を、畑作などに有効活用する取り組みは、環境負荷の少ない循環型農業としても対応が求められている。ただ、畑作地帯では需要増で不足傾向なのに対し、酪農地帯ではふん尿の排出量に比べて利用先は飽和状態にあるなど偏在が指摘されている。